

第7回ズーム三水会報告

「ブエン・ビビールとは？——ラテンアメリカ諸国の注目のコンセプト——」

2022年1月19日午後4時～6時

発表者 富沢賢治様

司会 岡本好廣様

参加者（敬称略）

野口幹夫 村澤澄子 小寺隆三 小関 栄 丸山茂樹 斉藤嘉璋 石塚秀雄 杉本茂樹

大多和巖 中川雄一郎 今尾和実 團野廣一 本城 昇 重原祐治

会は新入会者 本城 昇氏と 重原祐治氏の紹介・自己紹介の後

下記の講演があり、質疑と討議が行われた。その進行は次のビデオをご覧ください

<https://youtu.be/2NiSLsxBaHo>

<https://youtu.be/QireyXsTxSQ>

ブエン・ビビール（よい生き方）とは？

—— ラテンアメリカ諸国の注目のコンセプト ——

富沢 賢治

*本報告の詳細は、拙稿「連帯経済の基礎的コンセプトとしての『ブエン・ビビール』『協同の発見』2020年12月号。Web上の「富沢賢治のページ」からダウンロードできます。

目次

- I はじめに
- II ブエン・ビビールというコンセプト
- III ソロンの見解
- IV アコスタの見解
- V ランタの見解

I はじめに——なぜこのテーマをとりあげるか——

- 1月に新年の計をたてる。多くの人は「お金が欲しい。経済成長と好景気」を望む。しかし、自然には限界がある（地球温暖化など）。そのため、地球の危機を問題視して「脱成長」「反成長」を主張する見解が生じている。では、経済は成長を脱して、どこに向かったらよいのか？

今日は、この問題を考えるうえで、ラテンアメリカ諸国における「反成長」論議を考察したい。とりわけ、「反成長」論議の基礎をなしているブエン・ビビールという思想を紹介することによって、討論の種を提供したい。

● 私の問題意識における「ブエン・ビビール」の位置

前回の報告（2021年7月）では、労働者協同組合について述べた。最近、協同組合など民間非営利組織が担う経済を「社会的連帯経済」として捉える議論がある。国連、ILOなども問題提起している（2022年6月のILO総会のテーマ）。

「社会的連帯経済とはなにか？」という岩垂弘さんの質問にうまく答えられなかった。社会的連帯経済についての解説書が必要とされている。できれば数人の協働で「社会的連帯経済とはなにか」というテーマで研究会を開き、その研究成果を本にまとめたたい。

その構成案。

タイトル 『社会的連帯経済』

目次

I 思想的源流

1. 「社会」とは（ロバート・オウエン）
2. 「経済」とは（カール・ポランニー）
3. 「社会的経済」とは（EUの見解）
4. 「連帯経済」とは
 - （1）総論（草の根組織が担う経済）
 - （2）「草の根組織」を支える伝統的共同体の思想（ブエン・ビビール）

II 社会的連帯経済

1. 国連社会的連帯経済タスクフォース（TFSSE）の見解（社会的目的の実現を目指して、住民組織が担う経済）
2. 国際労働機構（ILO）の見解（2022年6月総会での成果を含む）

III 事例

1. モンドラゴン協同組合
2. 日本の労働者協同組合
 - (1) 歴史と現状
 - (2) 労働者協同組合法

● 伝統的共同体の思想を検討する意義

古い思想として否定的に評価されることが多い。しかし、現実にも共同体を継続させてきた思想である。コミュニティを守る思想の核心は何かという問題を考察するさい伝統的共同体の思想を全面的に否定するのではなく、より深い分析が必要ではないか。

エクアドルとボリビアは、「ブエン・ビビール」「ビビール・ビエン」を憲法の基本理念とした。しかし、理念と現実との相克が生じた。これらの事例を研究して、「社会の継続性を可能とする思想の核心は何か。」「近代国家体制との基本的矛盾は何か。」「理念と現実との相克をどう克服するか。」などの問題について考える必要がある。

● 今日の会ではブエン・ビビールの思想を紹介することにとどめる。「ブエン・ビビール」というカタカナで表現すると疎遠なものを感じるが、結局は「よい生き方」の問題なので、「自分が考えるよい生き方」という視点から自由に感想を述べていただきたい。皆さんからのコメントを今後の研究の糧にさせていただきたい。

● 以下、ボリビアについてはソロンの見解、エクアドルについてはアコスタの見解を紹介して、最後に、ブエン・ビビールという理念が現実の政治でどのように変質するかという問題を考察したランタの見解を紹介する。ソロンの論文がブエン・ビビールというコンセプトについての総論だとすれば、アコスタの論文は、そのコンセプトの核心をなす「自然の権利」という考え方を解明する特論である。また、ランタの著書『新自由主義的グローバリゼーションのオルタナティブとしてのビビール・ビエン：原住民の理念による国家の脱植民地化は可能か』(2018年)は、理念と現実との相克を問題とする特論として位置づけられる。

II ブエン・ビビールというコンセプト

ブエン・ビビールというコンセプトがラテンアメリカ諸国における社会的連帯経済の共通の哲学的基盤をなしつつある。国連の社会的連帯経済推進タスクフォースは、「ラテンアメリカでは社会的連帯経済が、ブエン・ビビールという原住民のコンセプトと共鳴している」と述べている。

「ブエン・ビビール」(buen vivir) はエクアドルで用いられる名称であり、ボリビアで

は、「ビビール・ビエン」(vivir bien) という名称が用いられる。国によって名称が異なることがあるが、基本的な考え方は共通している。「ブエン・ビビール」は、直訳すれば「よい生き方」であり、英語では good living などと訳されている。「ビビール・ビエン」は、直訳すれば「よく生きる」であり、英訳すれば live well である。

「ブエン・ビビール」も「ビビール・ビエン」も、他国語に翻訳された途端に、そのコンセプトがもつ独自の豊かな内容が失われてしまう。したがって多くの場合、「ブエン・ビビール」も「ビビール・ビエン」も翻訳されないで用いられる。国際的にはブエン・ビビールという名称で代表されることが多いので、本報告においてもブエン・ビビールを代表的名称として用いることにする。

ブエン・ビビールは、数千年にわたって伝統的の共同体の中で生き続け、コミュニティを守り続けてきた原理であり、原住民たちが自ら守り続けてきた智恵である。それは、コミュニティの維持に悩む近代社会に対する古代人からの問題提起とも解釈できる。

ラテンアメリカ地域研究者である幡谷則子は、ブエン・ビビールについて、およそつぎのように述べている。

ブエン・ビビールはアンデス高地先住民族の宇宙観を表す概念である。もともとは彼ら独自の言語で表現されていたが、それをスペイン語に訳したものである。ブエン・ビビールは、欧州中心的な近代化と植民地主義に抵抗し続けた先住民の長い歴史から生まれてきた概念である。先住民文化には、あらゆる営みは生命を中心に行われるべきだという宇宙観がある。これは、人間中心主義的な西洋の観点に対抗するものである。先住民が重視するのは、「発展」ではなく「善く生きる」である。これは「生命中心文明」を意味し、人々が社会的に生態的に調和のある状況を完全に実現しようとする取り組みに当てはめられる。

Ⅲ ソロンの見解

ボリビアのケースについては、ビビール・ビエンの提唱者である P. ソロンの見解を紹介する。

ソロンは、種々の社会運動、原住民運動、人種団体、文化団体で活動しており、モラレス政権のもとでは、南米国家連合 (UNASUR) の大使として地域経済統合と通商を担当した (2006 年 12 月～2008 年 5 月)。その後、ボリビア国連大使に任命され、憲法に明記された「ビビール・ビエン」と「マザー・アースの権利」を国際的に普及するように努めた (2009 年 2 月～2011 年 7 月)。その経験が強く影響していると思われるが、ソロンの論文「ビビール・ビエン」(2017 年)は、国際社会にとっては新しいコンセプトであるビビール・ビエン

について、誰にでもわかるように丁寧に説明している。しかも実践家らしく情熱をこめて国際的連帯運動強化の必要性を強く訴えている。ソロンの論文は、ビビール・ビエンの核心をなす「パチャ」(全体)(自然と人間の一体性)という概念を理解するための基本的素材を提供している。

ソロンは、およそつぎのように述べている。

1. ビビール・ビエン概念の基本的要素

ビビール・ビエンは、時間と空間についての哲学的考察から始まり、人と自然の関係に関わる宇宙観に向かって進む、複雑でダイナミックな概念である。ビビール・ビエンと関連がある他の概念(コモンズ、脱成長、エコフェミニズム、脱グローバル化、エコ社会主義など)と比較すると、ビビール・ビエンの特徴は、下記の点にある。

(1) 「全体」(パチャ)という考え

ビビール・ビエンにおいて全体は「パチャ」と表現される。パチャは、空間と時間の分かちがたい一体性を含意する。パチャは、常に運動している全体であり、常に生成している宇宙である。パチャは、生物世界だけでなく、天空、そして死者・霊が住む世界を含む。それらは相互につながっており、その全体が一つの一体性を成している。

この空間においては、過去、現在、未来が共存し、ダイナミックに結び合っている。過去は常に現在であり、未来によって再創造される。

時間と空間は、直線ではなく、循環する。直線的な成長や進歩という考え方はとらない。時間は螺旋状に進む。未来は過去につながっている。何事も永遠ではなく、すべてのものは変化し、そこで過去・現在・未来が再び会う。

好ましい政策は、一部分ではなく、全体を勘案したものでなければならない。一部分(例えば、財の蓄積)だけを目的とした政策は、不可避的に全体の中での不均衡をもたらす。いかなる政策も、すべての部分の多様な側面と相互関係に配慮すべきである。

(2) 多要素の共存

すべてのものは、矛盾する要素を含む。例えば、善と悪は常に共存する。すべてのものは肯定的であり、否定的である。人はこの二重性の中で共生する。問題は、たんに「存在すること」ではなく、「全体の中に存在する自分」と「そのような自分と対立する自分」とを相互に結びつける方法を学ぶことである。

ビビール・ビエンは平等主義ではない。不平等と格差は存在する。重要なことは、それを取り除くことではなく、それと共存し、不平等や格差が全体を脅かすほどに二極化するのを防ぐことである。

基本的なことは、コミュニティの中で生き、全体の多様性を尊重することである。ビビール・ビエンは、「幸福である」という「人の状態」よりも、「よく生きる」という「人の本質」に関わる。

(3) 均衡の追求

ビビール・ビエンの課題は、楽園の実現ではなく、全体を構成する種々の要素の間の均衡を追求することである。人間間の調和だけでなく、人間と自然、物質と霊、知識と知恵、多様な文化、異なる現実の間の調和を追求することである。

ビビール・ビエンは、永久的な成長ではなく、均衡を追求する。あらゆる均衡は、新しい矛盾をもたらし、再び均衡を回復するための新しい行動を必要とする。その行動は、空間・時間の中での循環的変化の基本的な源となる。均衡は常に動的である。

(4) 多様な主体の相互補完性

対立物の間の均衡は、一方を抹消するのではなく、相互補完性によって実現される。相互補完性とは、差異を全体の一部であると考えてることによって成り立つ。差異は、自然および生命の一部である。

相互補完性は、諸力の組み合わせによる最適化を求める。たとえば、最も不利な条件の下にある者に対して有利なルールを導入することによって、すべての者の向上を図ることができる。

ビビール・ビエンは、多様なものの出会いであり、多文化主義の実践である。

2. ビビール・ビエンを可能とする条件

ビビール・ビエンの真髄は、コミュニティの強化、相互補完性の促進、均衡の追求である。

ビビール・ビエンを可能とするためには、下記の諸条件が必要である。

(1) 国家至上主義の克服

「ビビール・ビエンの実現において国家が社会全体の組織者や計画者の役割を担うことはできないし、担うべきでない。国家は保護者的でないやり方でコミュニティと社会団体の能力の強化に貢献する補助的な要素でなければならない。」

(2) 地域と共同体の力量の強化

ビビール・ビエン経済が実現できるのは、資本の支配が克服される場合だけである。資本の支配を克服するためには、地域と共同体の力量の強化が不可欠となる。

(3) 国際的な相互補完性

資本主義的、生産主義的、人間中心主義的なグローバル経済の中で、ビビール・ビエンを一国だけで実現させることは不可能である。変革のプロセスがグローバル権力の中心部に広がらない限り、それは孤立化し、活力を失い、ついには変革のプロセスを生み出した原理や価値観そのものを否定してしまうであろう。

ビビール・ビエンの未来は、地球上の異なる大地で、基本的に同じ目的に向かっている多様な構想の活性化に大きく依存している。ビビール・ビエンは、他のオルタナティブなシステムの構想との相互補完を通じてのみ可能である。

IV アコスタの見解

エクアドルのケースについてはブエン・ビビールの提唱者である A. アコスタ（エクアドル・ラテンアメリカ社会科学研究所の教授）の見解を紹介する。彼は、2007年から2008年にかけてエクアドル憲法制定議会委員長を務めた。彼の論文「発展に対するオルタナティブとしてのブエン・ビビール」（2016年）は、ブエン・ビビール概念についての理解を深めるだけでなく、エクアドル憲法の一大特徴である「権利の主体としての自然」についての理解の深化にも貢献する。ブエン・ビビールというコンセプトにおける自然観を理解するための好論文である。

アコスタは、およそつぎのように述べている。

1. ブエン・ビビールとは

「ブエン・ビビールは、民衆の闘争（とくに原住民の闘争）が高まる中で発展してきた、オルタナティブな生活を探求する大きな動きの一部である。それは植民地主義への抵抗とその結果を要約したものであり、資本主義的な近代に完全には取り込まれていない多くの原住民の共同体で実践されている生活様式である。」

ブエン・ビビールは、従来型の経済発展パラダイムに対するオルタナティブを提示して、文明の転換を促す。それは、先進工業国で展開している脱成長論と共振する。ブエン・ビビールは、生産力至上主義的な発展の概念と機械論的な世界観を解体して、西欧文明とは異なる世界観を提示して、新しい生活様式を社会全体で構築することを目的とする。

資本主義は本質的に、略奪と搾取によって成り立つ文明である。それは、「生命と生命世界を窒息させることで生きながらえるシステム」である。これに対して、「尊厳ある維持可能な生活様式を構築すること」が必要である。新社会の構築は、平等と公平性と正義の拡大に基づきながら、「万人にとってより多くの自由を創出する取り組み」（K. ポランニー）を構想することで実現される。

2. 自然観

自然資源の「開発」を通じて地球の破壊が生じている。「人間中心主義的な世界観から生命中心主義へと移行していかなければならない。」経済的目標を自然のシステムの運動法則に従わせなければならない。そのためには、自然の脱商品化が不可欠である。

エクアドル憲法（2008年）の第71条では、「生命が生まれ再生産される場である自然あるいはパチャ・ママ（母なる大地）は、権利を持つ。自然の存在は、その循環・構造・機能・展開過程の維持と再生を通して、完全に尊重されなければならない」と規定されている。同憲法は、自然を権利の主体として理解して、破壊されたならば修復される権利を自然に付与しているのである。

3. 経済観

（1） 経済と社会と自然の関係

経済は、生態系の循環を守りながら、社会的要求を優先させる生産消費関係を構築するものでなければならない。社会の要求と自然の再生産能力よりも経済を高く価値づけてはならない。ブエン・ビビールは、自然との調和を掲げ、使用価値へと回帰することで経済発展に替わる展望を示す。

社会の市場化がもたらす社会の歪みと自然の商品化がもたらす環境破壊を防がねばならない。経済成長ならびに物質的富の永続的な蓄積を準拠として掲げる、経済発展の考え方を解体して、社会と経済の再編成を促しうる政策が必要である。

（2） ブエン・ビビールの経済とは

ブエン・ビビールの経済は、「連帯と互酬性、環境の持続可能性と民主主義に立脚した経済」である。連帯経済は、「経済を自然の中に埋めこむという課題」に挑戦する。

（3） 市場と社会と国家の役割

「資本の観点からだけでなく、社会の観点から財とサービスの交換を行う空間として市場を理解しなければならない。大切なのは、国家を媒介として、社会が規範とルールを設定して、市場を機能させる責任を担うことである。」

「連帯と互酬性と持続可能性を基礎とする経済のダイナミズム」が、民衆運動と国家政策を通じて、経済の再配分機能を強化し、また、「民衆のための市場の構築」を促進するならば、経済の好循環が内発的に生じうる。

民主的な社会の創造のためには、民衆の参加が不可欠である。「市場は市民性を持たなければならないし、国家は市民的な国家になるべきである。つまり、市場においても国家においても社会の参加が拡大されなければならない。」

（4） 政策課題

人間は、自然の一部として、ブエン・ビビール経済の構築プロセスの中心に位置づけられる。この意味で、労働の尊厳を取り戻さなければならない。労働者が決定的なアクターになれるように、あらゆる種類の企業の共同管理の枠組みを強化しなければならない。

4. 法制化の問題点

ブエン・ビビールの思想は、新自由主義への抵抗を経由して、いくつかの国で制度化されている。エクアドル憲法とボリビア憲法では、ブエン・ビビールが植民地的な経済発展概念のオルタナティブとして掲げられている。

しかし、思想と実践との間には大きな隔りがある。ブエン・ビビールを憲法に規定するまでに至った国であるエクアドルとボリビアにおいてさえ、開発主義の基本的テーゼと資源開発主義的な政策が進行している。実際に、これらの国では資本主義の現代化が提案されている。そこでは、「ブエン・ビビールは、技術的・官僚的な曖昧模糊とした言語で彩られた官僚用語に成り下がっている。それは国のプロパガンダと官僚に利用され、内容は乏しく、技術用語に成り下がっている。このような還元主義的で視野の狭いアプローチは、ブエン・ビビールの将来を危うくするものになるだろう」。

V ランタの見解

E. ランタ(ヘルシンキ大学講師)の著書『新自由主義的グローバリゼーションのオルタナティブとしてのビビール・ビエン』(2018年)は、ボリビアの現実の政治体制におけるビビール・ビエンの実現過程を詳細に分析している。本書は、本書の副題である「原住民の理念による国家の脱植民地化は可能か」が直截に示すように、ビビール・ビエンという原住民の理念が、現実の政治体制に移される際の変質過程を客観的に分析している。ビビール・ビエンにおける理念と現実との関わりを理解するうえで貴重な著書である。

ランタは、およそつぎのように述べている。

1. ビビール・ビエン理解

ビビール・ビエンは、表現も意味も民族間で若干異なるが、共通点は、西欧の『発展』概念に対抗するための脱植民地化の努力を表現しているというところにある。原住民のコミュニティにはそもそも「発展」(development)というコンセプトはない。経済発展を重視する資本主義も社会主義も、西欧思想の文脈から派生したものである。

「スマ・カマーニャ」は、コミュニティの仲間、自然、霊的世界との共存と相互依存を意味する。そこではコミュニティを形成するあらゆる要素の間の調和が大切だとされる。たとえば、結婚式の祝辞では、多くの場合、「家族、親戚、コミュニティのなかでの調和ある生

活が大切だ」と強調される。コミュニティの責任と義務を果たす人は、豊かでよい生活をしていると見なされる。なぜならば、その人は、社会的、経済的、精神的な関係の網の目のなかで生きており、助け合いの行為を通して他者とともに生きる（c o n v i v i r）力があるからだ。このように、「ビビール・ビエン」は、なによりもコミュニティを支える根本的な思想として生き続けてきた。

2. 理念の現実化

原住民の理想を託している「ビビール・ビエン」という哲学は、ボリビアの新国家形成の過程で本来の理念から全く異なるものとなった。ビビール・ビエンの理念は、その実践の過程で、官僚などの植民地主義的な発想と新自由主義的な発想によって脱政治化される。ビビール・ビエンは、多様な意味合いで用いられ、空虚な用語になる。ビビール・ビエンという用語は、新自由主義的な経済発展政策においてさえ用いられるようになる。エクアドルでは、ブエン・ビビールが植民地主義的な原住民管理政策のために用いられた。

グローバル企業が巨大な力をもつかぎり、人々の中の分裂はいぜんとして残り、変革のプロセスは対立性を伴わざるをえない。現実にはビビール・ビエンの理念のもとで、多くの矛盾した傾向が見られる。すなわち、一方では原住民自治の推進への流れと、他方では、国家の中央集権化と新自由主義的な自然資源採掘の進行が見られる。